

The Whisper from Amherst

～エミリーのささやき～

アメリカの南北戦争(1861年 - 1865年)が激化する1862年は、エミリーの生涯を通して最も多作な年であり、366篇もの詩を書きました。当時彼女は32歳でした。

1857年11月に創刊されたアメリカの文芸雑誌「アトランティック・マンスリー」に多くの文章を書いていた随筆家、^{トマス ウェントワース ヒギンソン} Thomas Wentworth Higginson に4篇の詩を送り、評価を求めました。彼は、詩に添えてあったエミリーの手紙の1文「もし私の書き方が間違っていましたら、それをはっきり教えてください」という依頼にしたがって、韻律などの形式的な事柄に関して手厳しい批評を下しました。

エミリーは、自分の詩が因襲的な形式と合致しないことを直感的に知っていましたが、ヒギンソンに認めてもらえなかったことは無念でなりません。しかし、ヒギンソンはエミリーの大胆な発想を受け入れる素地はなく、詩法や脚韻の規律に配慮するように求めました。

エミリーはヒギンソンにわずか16篇の詩を送ったのち、自分の詩法について論議を交わすことをあきらめてしまいます。

アイ キャンノットウ ダンス アポン マイ トウズ
 ‘I cannot dance upon my Toes-’

I cannot dance upon my Toes-

わたしはつま先では踊れません

^{ノウ マン インストラクティドゥ ミー}
 No Man instructed me-

だれも教えてくれませんでした

^{バトゥ オウフンタイムズ アマング マイ マインドウ}
 But oftentimes, among my mind,

けれどもときどきわたしの心の中で

^{ア グリー ポゼセス ミー}
 A Glee possesseth me

ある喜びがわたしをとらえて

^{ザトゥ ヘドゥ アイ バレエ ナ レ ジ}
 That had I Ballet knowledge-

もし わたしがバレエを知っていたら

^{ウドゥ プトゥ イウセルフ アブロードウ}
 Would put itself abroad

きっと仲間たちを青ざめさせるか

イン ピル エ ッ トゥ ブランチ
In pirouette to blanch a Troupe— プリマドンナを仰天させるほど

オア レイ ア プウリマ マドゥ
Or lay a Prima, mad, ピルエットで表すでしょう

エン ソ ウ アイ ヘドゥ ノウ ガウン オヴ ガーズ
And though I had no Gown of Gauze— わたしは薄地の衣装もなく

ノウ ウリングレット トゥ マイ ヘア
No Ringlet, to my Hair, 髪に飾る環もつけていません

ノーア ホ ブトゥ フォー オウディエンシズ ライク バーズ
Nor hopped for Audiences-like Birds, また鳥がするように片足をあげて

ワン クロウ アボン ディ エア
One Claw upon the Air, 観衆に向かって飛んだり

ノーア ト ストゥ マイ シェイプ イン アイダー ボウルズ
Nor tossed my shape in Eider Balls, 綿毛に包まれた体を動かしたり

ノーア ウロウルドゥ オン ウィールズ オヴ スノウ
Nor rolled on wheels of snow 雪のように白い輪を描いて回転しません

ティル アイ ワズ アウトゥ オヴ サイトゥ イン サウンドゥ
Till I was out of sight, in sound, 舞台から消えて盛んに

ザ ハウス エンコーア ミー ソウ
The House encore me so— 会場がアンコールを求めるまで

ノウ エニー ノウ アイ ノウ ディ アートゥ
No any know I know the Art またいま こうして気楽に口にする技を

アイ メンション イーズィ ヒヤ
I mention — easy — Here— わたしが知っているとはだれも知らず

ノーア エニー プラカードゥ ボウストゥ ミー
Nor any Placard boast me— どの広告もわたしの名を宣伝しません

イツ フォー アス オーパラ
It's full as Opera— それはオペラに劣りません

エミリーは古典バレエと新しい自由なダンスとの比較を通して、詩作の技法にふれ、若い頃から傾倒してきたアメリカの思想家であり詩人でもある^{ラルフ ワルド エマソン}Ralph Waldo Emerson (1803-1882)のことは、「詩を詩たらしめるものは韻律ではなく、韻律を生み出す内容である」を信じてきました。ですから、自分は何だれに教わるでもなく、自分の感情の赴くままに書いているのであり、たとえ詩の書き方というものを知らなくても世間をあっと言わせることができ、オペラにも劣らない作品を世に送り出すことができると自負した作品です。

Nellie's Mom



Ralph Waldo Emerson



バレエの回転技 ‘ピルエット’



現在も刊行されている Atlantic Monthly 誌